

精一杯生きた我が子を見送って

九州大学病院小児医療センター親の会“すまいる”・NPO法人福岡子どもホスピスプロジェクト啓発チーム

添田 友子

私の次女、添田千歳は、急性リンパ性白血病を患い、4年半の治療をがんばったにもかかわらず、7歳10ヶ月で亡くなった。2018年8月のことだ。「4年半もの治療」の甲斐虚しく…ではあったが、千歳の生涯は決して虚しいだけものではなかった。闘病中に、すぐそばにいてくれた看護師さんたちがもたらしてくれた優しさや心の触れ合いは、千歳の毎日を豊かに彩ってくれ、千歳は精一杯、命を輝かせることができた。

子どもを亡くした親は、闘病を過ごした病院には簡単に近づくことができなくなる。それは、恨んでいるとか憎んでいるとかではなく、様々な感情が渦巻いて、その場に立っていることすら自信がないほど気持ちのコントロールが難しくなるからだ。

私は、2021年6月に「日本小児看護学会第31回学術集会」において、全国の親の会の皆さんの想いを1本の動画にまとめる役を仰せられた。そこで、闘病を乗り越えて過ごしている親御さんや子どもたちも、子どもを見送った親御さん方も、ほとんどの方が看護師さんをはじめとする医療従事者の皆様へのあふれる感謝の想いを持っていることに改めて気づいた。一方、今も現場で活躍されている看護師さん方は、日々目の前の患者さんやご家族とのコミュ

ニケーションに悩んでいたりと、過去のふるまいを悔いておられる方が多くいることを知った。

我々、子どもの闘病を通してお世話になった医療従事者に感謝の想いを抱いている者は、きちんと言葉にして伝えていくことが必要なのではないかと考えた。そうすることで、看護師さんをはじめとする医療従事者は目の前の子どもの声掛けやふれあいにきっと生かしてくれる。そう願ひ、私が娘の闘病中に抱いた辛さや苦しみ、そして感謝の気持ちをここに報告する。

子どもを亡くした親は、この上ない悲しみの中にある。それでも顔をあげて何とか生きていこうとするのは、失った我が子を悲しませたくないから。その辛い日々の中でも、心の支えになるのは、たとえ闘病中でも娘が娘らしく生きた日々を想うこと。どんなに時がたってもその思い出や笑顔に支えられる。病気の子もたちが精一杯その子らしく過ごせるようなふれあいをこれからも願いたい。

もう一つは、千歳と同じような子どもたちの力になりたいと思うこと。娘に何もしてやれなくなった今自分にできることを日々模索し挑戦し続けていることの実際をお伝えする。